読む・百人一首001

天智天皇

秋の田の
かりほの庵の
苫をあらみ
わが衣手は
露にぬれつつ

あきのたの
かりほのいおの
とまをあらみ
わがころもでは
つゆにぬれつつ

読む・百人一首002

持統天皇

春過ぎて
夏来にけらし
白妙の
衣ほすてふ
天の香具山

はるすぎて
なつきにけらし
しろたえの
ころもほすてふ
あまのかぐやま

読む・百人一首003

柿本人麻呂

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む

あしびきの
やまどりのおの
しだりおの
ながながしよを
ひとりかもねむ

読む・百人一首004

山部赤人

田子の浦に
うちいでてみれば
白妙の
富士の高嶺に
雪はふりつつ

たごのうらに
うちいでてみれば
しろたえの
ふじのたかねに
ゆきはふりつつ

読む・百人一首005

猿丸大夫

奥山に
紅葉踏み分け
鳴く鹿の
声聞く時ぞ
秋は悲しき

おくやまに
もみぢふみわけ
なくしかの
こゑきくときぞ
あきはかなしき

読む・百人一首006

中納言家持

かささぎの
渡せる橋に
おく霜の
白きをみれば
夜ぞふけにける

かささぎの
わたせるはしに
おくしもの
しろきをみれば
よぞふけにける

読む・百人一首 007

安倍仲麿

天の原
ふりさけ見れば
春日なる
三笠の山に
いでし月かも

あまのはら
ふりさけみれば
かすがなる
みかさのやまに
いでしつきかも

読む・百人一首 008

喜撰法師

わが庵は
都の辰巳
しかぞ住む
世をうぢ山と
人はいふなり

わがいおは
みやこのたつみ
しかぞすむ
よをうぢやまと
ひとはいふなり

読む・百人一首009

小野小町

花の色は
うつりにけりな
いたづらに
わが身世にふる
ながめせしまに

はなのいろは
うつりにけりな
いたづらに
わがみよにふる
ながめせしまに

読む・百人一首010

蝉丸

これやこの
行くも帰るも
わかれては
知るも知らぬも
逢坂の関

これやこの
ゆくもかえるも
わかれては
しるもしらぬも
あふさかのせき

読む・百人一首011

参議篁

わたの原
八十島かけて
漕ぎ出でぬと
人には告げよ
海人の釣船

わたのはら
やそしまかけて
こぎいでぬと
ひとにはつげよ
あまのつりぶね

読む・百人一首012

僧正遍昭

天つ風
雲の通ひ路
吹きとぢよ
をとめの姿
しばしとどめむ

あまつかぜ
くものかよひぢ
ふきとぢよ
をとめのすがた
しばしとどめむ

読む・百人一首013

陽成院

筑波嶺の
峰より落つる
みなの川
恋ぞ積もりて
淵となりぬる

つくばねの
みねよりおつる
みなのがは
こひぞつもりて
ふちとなりぬる

読む・百人一首014

河原左大臣

陸奥の
しのぶもぢずり
誰ゆゑに
乱れそめにし
我ならなくに

みちのくの
しのぶもぢずり
たれゆゑに
みだれそめにし
われならなくに

読む・百人一首015

光孝天皇

君がため
春の野に出でて
若菜摘む
わが衣手に
雪は降りつつ

きみがため
はるののにいでて
わかなつむ
わがころもでに
ゆきはふりつつ

読む・百人一首016

中納言行平

立ち別れ
いなばの山の
嶺に生ふる
まつとし聞かば
今帰り来む

たちわかれ
いなばのやまの
みねにおふる
まつとしきかば
いまかへりこむ

読む・百人一首017

在原業平朝臣

ちはやぶる
神代も聞かず
竜田川から
くれなゐに
水くくるとは

ちはやぶる
かみよもきかず
たつたがは
からくれなゐに
みづくくるとは

読む・百人一首018

藤原敏行朝臣

住の江の
岸に寄る波
よるさへや
夢の通ひ路
人目よくらむ

すみのえの
きしによるなみ
よるさへや
ゆめのかよひぢ
ひとめよくらむ

読む・百人一首019

伊勢

難波潟
みじかき蘆の
ふしの間も
逢はでこの世を
過ぐしてよとや

なにはがた
みじかきあしの
ふしのまも
あはでこのよを
すぐしてよとや

読む・百人一首020

元良親王

わびぬれば
今はた同じ
難波なる
身をつくしても
逢はむとぞ思ふ

わびぬれば
いまはたおなじ
なにはなる
みをつくしても
あはむとぞおもふ